ムスリム理解を促す社会科地理学習の在り方

◎荒井　正剛（東京学芸大学人文科学講座社会科教育学分野）
〇椿　真智子（東京学芸大学人文科学講座地理学分野）
小林　春夫（東京学芸大学人文科学講座哲学・倫理学分野）
秋山　寿彦（東京学芸大学附属世田谷中学校）
浦　　達志（東京学芸大学附属小金井中学校）
田﨑　義久（東京学芸大学附属小金井中学校）
栗山　絵理（東京学芸大学附属高等学校）
中村　文宣（東京学芸大学附属国際中等教育学校）
代表者連絡先：masaarai@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】ムスリム，社会科教育，異文化理解，意識調査，留学生，固定観念，授業実践

1　はじめに

イスラーム過激派によるテロ行為が頻繁に報道されるようになり，イスラーム全般に対する否定的なイメージが強まっている。その一方で，インドネシアやマレーシア等からの訪日旅行者が急増して，ハラールフードをはじめムスリム観光客の受け入れ態勢に関する取り組みが話題に上るようになった。学習指導要領も「宗教に関する学習の重視」を謳っており，ムスリムに対する理解は急務である。ところが，乾燥地域という日本とは著しく異なる環境で生まれたイスラームについての理解は，日本人には容易ではない。特にイスラームの六信五行が，厳しい宗教というイメージを助長しやすい。

本プロジェクトでは，異文化理解に深く関わってきた地理教育において，宗教学の視点も取り入れ，ムスリム理解を促す学習の在り方について研究することにした。

１年目は基礎研究として，学生のイスラームについての知識と意識，内外の教科書における取扱い等について調査したほか，大塚マスジドや蒲田マスジド，本学留学生への聞き取りを通してムスリムのイスラームについての考えなどを調査した。それらを踏まえて，２年目に教材開発を検討し，授業を実践した。メンバーの校務分掌の関係で，また，高等学校地理の必修化と中学校・高等学校の連携強化の要請とを踏まえて，当初は地理的分野だけの予定であったが，中学校では全分野の教材開発を行うことにした。なお，本学学生への啓蒙の意味も含めて，本学留学生との座談会の場を設けた。

2　本プロジェクトの内容

（1）生徒・学生のイスラームについての知識・意識

中学校社会科・高等学校地歴科の教員免許取得に必要な講義の本学受講生 108 名に調査した。ムスリムの生活習慣に関しては，五行や衣食の禁忌の正答率は高い。しかし，「女性は黒い布で全身を隠す義務がある」は誤りであると答えられた学生は約２割に過ぎなかった。地理的分布の知識については，ムスリム最多地域を選択する問題の正答率がわずか６分の１程度に止まるなど，かなり貧弱であった。イスラームに対するイメージでは，キリスト教や仏教と比べても，「奇妙な習慣を持つ」，「不自由」，「攻撃的で怖い」，「得体が知れない」といった否定的なイメージが突出して高い。その一方で，女性

を差別しているか否かについては，女子を中心に慎重な回答が多かった。否定的なイメージ，情報のテレビ依存という傾向は，10 年前に本学学生に対して行った小林の調査結果と変わっていない。

授業実践対象生徒に授業前に同様の調査を行ったところ，これも大学生の調査結果とほぼ同じ傾向が見られたが，中学校１年生では「さばくの宗教」，「ひげを生やしている」，「理解しやすい」という回答率が低かった。また，高校生に対する調査から，キリスト教や仏教と比べて，イスラームについての情報に接する機会がたいへん多く，特に事件・犯罪については８割以上の生徒がよく耳にしていると答えている。中学入学後，マスメディアに接する機会が増えて，ムスリムによる事件報道に接し，イスラームに対して否定的なイメージが助長される傾向がうかがえる。

（２）地理教科書におけるムスリムの生活の内容

中学校の教科書では１日５回の礼拝や断食の記述のほか，集団で礼拝している写真や女性が全身を隠している服装の写真が全社で見られた。平成 24 年度版と比べて平成 28 年度版では，生活の地域的多様性により多く触れられるようになるなど，改善傾向が見られた。

高等学校の教科書では五行の内容がほぼ取り上げられている。西アジアとその近隣地域で取り上げられているためか，地域的多様性に関する記述は乏しい。また，イスラーム復興運動が取り上げられ，それについて西アジアの立場からの記述も見られる。

全体的にみて，生徒のイスラームに対する固定観念に揺さぶりをかけるような記述は少ない。

（３）社会科教育とイスラーム―ムスリム旅行者への対応も視野に入れて―

ドバイなどペルシャ湾岸諸国がリゾート地として若い女性の人気を集めるなどして日本人がイスラーム世界を訪れたり，訪日旅行者の急増によって日本人がムスリムと接触したりする機会が確実に増え，その形態も多様化している。滞在年数の長期化に伴って，ハラール食品などを扱うマーケットが出現したりモスクが設立されたりして日本社会でもイスラームが可視化・顕在化している。

日本政府観光局は，2013 年，東南アジアを中心にムスリム旅行者の拡大を図るため，ムスリム向けガイドブックを発行した。さらに，東京都が 2014 年に都内観光業者に向けて，また，観光庁が国内の飲食店や宿泊施設等に向けて 2015 年にそれぞれガイドブックを発行している。こうしたガイドブックには日常レベルでのムスリム個人の行動に差異のあることが指摘されている。社会科や地歴科において，多文化理解と共生に向けた態度育成を目指す上で，こうしたガイドブックの活用も考えられる。

地理学習では伝統的に地域的特徴や差異，特殊性を考察し，それらを生み出す地域的諸条件や要素間の関係性を説明してきた。しかし，しばしば表層的な地域や文化のパターンや違いを強調するあまり，自分たちとは異なる「異文化」としての固定的イメージを植え付けてしまう傾向も否めない。地域や場所をこえて共通する普遍的論理や人びとの思いや願いに対する理解や共感を止揚させてしまうことにも繋がりかねない。多様な文化や立場の異なる人びとに寛容性をもって接する態度や価値観を，地理学習においていかに醸成できるかは，多文化共生社会の構築にむけた重要な課題である。

また，イスラーム世界を自明視せず，イスラームの多様性に気付かせることと，イスラームでは，他の宗教と異なり，信仰だけでなく行為に移すことが求められている点に留意する必要がある。

（４）授業実践

ａ）中学校第１学年地理的分野「人々の生活と環境」

ムスリムの生活と宗教との関わりについて，当初は礼拝や断食については否定的で，当人たちには当たり前でも，自分は面倒で嫌という感情が見られ，共感的な生徒と否定的な生徒とほぼ半々に分かれた。ところが，ムスリムの話を聞いた後は，ムスリムに偏見を持っていた，誤解していたなどと，ほとんどの生徒が好意的な回答を示した。当初は厳しいなどと否定的に受け止めていた決まりについ

ても，人を助ける決まりを知って素晴らしいと思ったり，食や女性の服装についてムスリムの解釈に沿った回答をしたりした。報道の一面性に言及した回答も見られた。

ムスリムの生活の特色について当のムスリムがどう思っているか，それをとらえないと表面的な知識に止まり，かえって異文化理解を妨げることになってしまいかねないことがうかがえる。

ｂ）中学校第１学年歴史的分野「世界の古代文明や宗教のおこり」

現代を生きている自分との関わりを意識して，世界宗教へ多面的・多角的にアプローチした。

まずイスラームについて作成したイメージマップと収集した資料を通して，グループで話し合った。そして，イスラームが広範囲に広まった理由を考え，イスラームが「リスク」であるのか話し合った。その上で，イスラームについてのイメージマップを加筆修正して，自分の意見をまとめた。生徒は，宗教と文明や文化，人々の生活とのつながりに関心と理解を深めていった。

ｃ）中学校第３学年公民的分野「ムスリムと共に生きる」

地理的分野や歴史的分野での学習を基礎として，ムスリムとこれからどのように関わっていくことが「共生」「共存」を具現化していくことになるのかを，在日ムスリムや日本人ムスリマとの対話を取り入れたアクティブな学習活動を通して考えさせた。生徒は，ムスリムの立場を踏まえて，共生・共存のための様々な方策を提案できた。対話の効果がたいへん大きいことを改めて実感できた。

ｄ）中学校第３学年公民的分野「私たちの暮らしと現代社会」

国内でムスリムとの共生を考えるために，具体的なムスリムの人々の思いにふれ，信仰と結びついた生活を大切にしている姿を生徒に共感させることが必要であると考え，直接人と出会い知って，人間として同じ，変わらない部分があることを取り上げた授業実践に取り組んだ。

それに先立って，総合的な学習の時間で毎年行っている防災講演会に，大塚マスジドのムスリムの方を呼び，東日本大震災被災者支援等の相互扶助の活動について講演してもらった。信じている教えに基づく行動ができる強さ，優しさが素直に生徒の心に届いた。

社会科では，男女，年代，出身国の異なるムスリムと出会わせた。まずインドネシア人ムスリマ留学生に講演をしてもらった。女性の視点からのヒジャブのお話や実際にそれを巻く体験などを通して，そのかわいらしさやおしゃれ，ムスリム女性の慎ましやかな心などに生徒は共感できた。続いてムスリム女性向け水着ブルキニの禁止をめぐる記事について話し合った。非ムスリマにも支持されており一方的な考えの押し付けだという意見やイスラームへの理解不足で偏見であるなど，ブルキニ着用への理解を示す意見が多かった。イスラームやムスリムへの理解を深めることは，様々な少数者に対する私たちの心の持ち方や態度など価値観を変容させることにもつながることがわかった。

３時間目では，日本におけるムスリムとの共生のために必要なことについて考えさせた。警察のムスリムへの監視捜査をめぐる最高裁の合憲判断について討論した際，約４分の１の生徒が賛成し，テロの恐怖からムスリムなどへの否定的な思いがよぎっていることがわかった。次に日本育ちのパキスタン系高校生二人への授業者によるインタビューを見せた。生徒は同世代の思いに共感して，感謝や相手を尊重することなどの共通性に目を向けることが重要であると感じた。そして「ムスリムと一緒に生活する上でできることは何か」について，ムスリムの方々の話を受けて，これから自分が実際にできることを具体的に考えることができた。

価値観がそれなりに固まってきている高校生と違って，中学生の時期にイスラームやムスリムへの理解を深めることで，その価値観を柔軟に大きく揺り動かす可能性があることがうかがえた。

ｅ）高等学校第１学年地理Ａ　「マレーシアの生活文化」

生徒への事前調査と地誌的観点から，対象地域を砂漠ではない熱帯地域，さらにムスリムが半数以

上を占めるだけでなく様々な宗教を信仰する民族が居住するマレーシアに設定した。

１時間目でマレーシアの民族多様性の現状を把握させ，２時間目では，イスラームと文字，ムスリムの日常生活，産業とハラール，マレーシアの民族共生の４つの役割に分けてグループでプレゼン資料を作成させた。まとめとして「マレーシアの民族は共生していると考えるか否か」について自分の意見を書かせた。「異質な考えを認めない」「砂漠の宗教」というイメージが強かったイスラームの捉え方を緩和する一助になれば良いと思ったが，提供した資料がマレーシア社会の良い部分に焦点をあてたものが多く，大多数の生徒が「マレーシアの多民族は共生している」という意見になびいてしまったことは否めない。双方の側面から説明している資料を取捨選択するべきであった。

ｆ）高等学校第３学年地理Ｂ　「日本企業の海外戦略」

地理Ｂの「現代世界の系統地理的考察」の「世界の工業・第 3 次産業」に位置づけた実践で，海外進出における異文化理解の重要性をとらえさせるために，日本企業によるイスラーム圏での活動を取り上げた。地理学習でこれまでイスラームが取り上げられてきた宗教や文化，西アジア地誌といった分野ではない単元においてイスラームの要素を入れることでイスラームの理解を促す学習ができるのではないかという新たな試みである。

日本企業が海外進出を進めていった時系列的な流れなどを整理した後，日本企業の海外進出に必要な対応や戦略を考えるためのグループワークとして，インドネシアとフランスの２か国における食品メーカー（飲食業）の対応について考えさせた。ムスリムが多数を占めるインドネシアと北アフリカからの移民を多く受け入れているフランスを取り上げて，宗教的・文化的な対応を考えていく上でイスラームに関する意見が出てくることを想定した。生徒は地誌的学習で取り上げた内容などを振り返りながら企業の対応や戦略を相談していった。

インドネシアにおける対応として，ムスリムを想定した「豚肉を使用しない」といった意見が出されたものの，既習のハラールを考慮するまでには至らなかった。宗教や文化に対する意識の少なさを生徒自身が実感した。実社会で想定しうる状況を提示しながら，生徒自身に「自分事」としてイスラームに関する内容を考えさせることはイスラーム理解のみならず異文化理解の手段として有効であると考えることができた。また，取り上げたい事象との関係が比較的薄いと思われるものを組み合わせることで，生徒の考えや意識をより高めることにつながると考えられる。

３　研究の課題

本研究では，授業実践を踏まえて，中学校の３年間３分野の学習指導で，イスラームとムスリムの人々の生活をどのように関連付けて，何をどう取り上げていくべきか検討するまでには至らなかった。共感的な理解を促すには，ムスリムの話に耳を傾けることが生徒たちの固定観念を揺さぶり，効果的であるので，中学１年生の時に，地理的分野の学習で，留学生などとの交流を通じて，世界の人々の生活の多様性を直接人々の姿から学ぶとよいと考えられる。

中高の連携についても同様に検討する必要がある。本プロジェクトでは，高等学校については地理に限ったが，例えばイスラームの成立過程と対応させてイスラーム社会の特徴を理解させたり，現代においてもイスラーム法が道徳的・社会的規範としての影響力が大きいことに気付かせたりするなど，世界史や倫理の学習指導の改善が必要である。次期学習指導要領では中学校の歴史的分野でムスリム商人の活動などが取り上げられることになった。社会科だけでは時間に限りがあるので，総合的な時間や道徳の時間との関連を考えることもよいだろう。こうして，中等教育全体におけるイスラーム世界に関する学習指導の在り方や連携について検討する必要がある。